

# 教職経験の少ない担任のニーズと子どもの特性をふまえた 授業・生活ルールづくり支援

— 担任コンサルテーションと映像による支援 —

Support for Making Class Room/living Rules Based on Characteristics of Child's Needs and Teacher with Limited Experience : Support Using Consultations and Video

藤 尾 健 康  
Kenkou Fujio

## I. 問題と目的

通常学級には、発達に障害のある子どもたちがおり、教師からの特別な支援を必要としている。さらに、障害のある子どもの他にも、学級担任の個別の支援を必要としている子どもがいる。現在、発達に障害のある子どもへの特別な支援を行いつつ、学級経営に苦慮している学級担任は多い。

また、学級での指導を行う場合にも、ただ丁寧に指導する、覚えるまで書かせる等の表面的な対応に終始するなど特性に配慮しないことは、子どもにとって苦手な学習を強制することになり学習嫌いなこともある。発達に障害のある子どもは、学級での集団活動においてもつまずきがあり、周りの子どもたちと同じように達成経験を得ることは難しい（小島、2008）。

そこで、よりよい学級経営がなされることが特別支援教育の基盤になる。その中心として、授業づくりと基本的な生活習慣・ルールの定着があげられる。発達に障害のある子どもばかりでなく、周りの子にも、目標を明確に掲げ、手順をわかりやすく示してある授業や生活であれば、多くの子どもたちにとって居心地のよい満足度の高い学級になる。

研究1では、3名の教職経験の少ない通常学級の担任の先生に関わり、同室複数指導者の立場から、通常学級担任支援と3名の児童支援を通して、通常学級での授業づくりと生活ルールの定着を目指すことが、発達に障害のある子にも有効な支援となることを明らかにすることを目的とする。

研究2では、教職経験の少ない先生に対して、基礎的な指導技術や授業の進め方等のスキルの提案を通して若い先生のサポートの在り方について検討することを目的とする。

研究3では、特別支援教育における知識・支援方法の習得する際に、映像を活用することへの期待とその課題についても明らかにすることを目的とする。

## II. 研究1

### (1) 対象

学校：I町立J小学校（360人）

対象児：1年（A児）、2年（B児）、4年（C児）

学級担任：

	1年	2年	4年
男女	男性	女性	女性
教職経験年数	4	3	6

### (2) 手続き

期 間：X年4月～10月

介入方法：同室複数指導 学級担任へは、特別支援教育コーディネーターの役割で接した。

評価方法：観察 エピソード記録

ケース	1(1年)	2(2年)	3(4年)
担任のニーズ	授業づくり	生活ルール	生活ルール
子どもの特性	LD傾向	PDD	AD/HD傾向
支援の内容	特性把握	ルール作り	ルール作り
	支援方法	B児対応	C児への関わり方
結果	支援の工夫	学級の安定	C児の落ち着き
	見方の変化	授業の工夫	学級の規律

### (3) 結果と考察（ケース1のみ）

< 1年 >

#### 1. 授業づくり（見通しのもてる授業）

エピソード1（クラス）：1年生であり、集中力が続かない子ども多くいるクラス。周りがそわそわするとA児もつられてしまっていた。

そこで、①1時間の授業を3つに分け、今日することを黒板に明示し終われば、消す(モジュール型授業)。  
②読む、聞く、書く、話す、作業するなどのメリハリのある授業作りの提案

担任の感想：どの子にもわかりやすい。一年生なのであきにくく、テンポもよい。

## 2. 特性を把握し支援へ

### (1) 視覚の弱さを補う支援

エピソード2(個別)：音読学習ではじめて、自分一人で読む場面。「ほく、よめん。」ほとんど平仮名が読めていないことがわかった。

そこで、①50音下じきの活用②絵付きの平仮名カードの作成(筆者)により平仮名学習をすることを提案。平仮名カードで、どれくらい読めないか確認(16/44)。読めない16文字から類似性。その特徴を意識しながら一斉指導にも生かす(A児に、声かけ目を合わせる)。

児童の反応：50音下じきは、A児に大きな支援に。見ながら書いている。一斉授業の中でもかなり読めるようになった。

### (2) 視覚を鍛える支援

エピソード3(クラス)：A児の視覚の弱さに気づき、視覚を鍛えるトレーニングの提案(コラムサックード、ミシガントラッキング、文字探しなど)

担任は、A君を含むクラス全体で取り組む。短時間で楽しみながら、トレーニングのできるので子どもたちも好評。個別の指導が、クラス全体にもつながった。

### (3) 聴覚優位を生かす支援

エピソード4(グループ・個別)：A児に週1回程度、放課後に担任がグループ指導と個別指導を開始。

グループ指導では、モデルとなる友達の音読を聞かせ、A君にも繰り返し練習。自信を持たせる(聞いて確かめるとわかりやすい)。個別では、あらかじめ新出漢字を、書き順を音声に付けて練習。1対1では集中してできた。

## まとめ

A児は、多くの視覚情報がある状態が苦手であった。しかし、音声情報の方が、A児にとって入りやすい特徴を持っていた。通常学級担任がA児の学習での習得の得意不得意を把握し、個別指導やT T指導などの学

習スタイルや指導方法を工夫することでA児の学習に積極的に取り組む場面が、多く見られるようになってきた。また、A児に対する支援は、クラスの子にもよい支援となっていることで、通常学級担任も意欲的に取り組んだ。

## Ⅲ 研究2

授業のワンポイントの提案

### (1) 対象

研究1の3名の先生と5年担任の28才男性の先生を加え4名

### (2) 手続き

期間：X年4月～9月

提案方法：コンサルテーションの最後に授業の基本的スキルや授業スタイルのポイントを用紙にまとめ伝えた。

評価：観察、エピソード記録

### (3) 結果と考察

現在、担任が抱えている課題を聞き取ったり、授業の中からみえてきたりした課題を解決する手段として、コーディネーターが授業スキル・スタイルのワンポイントの情報提供をおこない始めた。提案は、一般的によくおこなわれている指導方法や今流行の指導スキルを含んで教職経験の少ない先生にも受け入れやすい内容をA4で2枚程度にまとめて手渡し説明した。

内容としては、「板書・教室掲示のスキル」「モジュール型授業」「絵画指導」「作文指導」「説明文の指導のポイント」「原稿用紙の工夫」「聴覚優位」「漢字の指導」「低学年を動かす魔法の言葉」「授業の基本」「デジタル教科書」等であった。

特にモジュール型授業の取り組みは、2年生の先生をターゲットにした提案だったが、他の先生にも授業の導入や特定の教科に部分的に取り入れる工夫も見られた。

## Ⅳ 研究3

DVDによる効果的な知識・支援方法の習得の検討

### (1) 基礎情報

日時 X年8月26日

学校 研究1と同じ

対象 小学校先生18名

### (2) 方法

現在の特別支援教育についての知識や支援方法の習得の主な方法は、書籍によるものや研修会（勉強会）やコーディネーター（巡回・専門家）などである。新たな習得方法の一つとして、チェックシートに支援の映像（DVD）が付いたアセスメント付き支援 DVD の開発をおこなった。

アセスメント付き支援 DVD（以下支援 DVD）の開発にあたってのコンセプトとして、特別支援教育についての基本的な支援の方法を映像化することに心がけた。また、いつでも使えるようにするため DVD にした。先生が、気になる児童についてのチェックシートによるアセスメントをおこない、どの支援が必要か考えたうえで、その方法を見ることができる。チェックシートには、香川県教育委員会の「特別支援のための実態把握チェックシート」を利用した。このチェックシートは、「今後の特別支援教育の在り方について」（最終報告）を参考に作成されたものである。

支援 DVD は、4つの場面で構成した。1の場面では支援の内容が分かるタイトル、2の場面では子どもの実態や特性等を解説、3の場面ではどのような支援をおこなうのか、なぜ有効なのか、4の場面では実際に支援を受けている場面をロールプレーで（出演者は、特別支援教育を専攻している院生）、支援のポイントを示しながら映像化した。

支援 DVD が、知識・支援方法の習得の新たな方法になりうるか検討をするため、アンケート（事前・事後）をおこなった。その際、この支援 DVD について説明をおこない見てもらった。

### （3）結果と考察

27%の先生が、映像を通しての情報習得を望んでいた。また、学校にその環境があれば見たい、少し見たいと考える先生は8割を越えた。これは、映像を通しての情報の取得に大きな期待があることをうかがわせた。チェックシートの利用については、使い勝手のよいものにする必要があった。さらに多くの先生に使ってもらうためのキーワードとしてあげられるのが、子どもの実態からの支援、多くの事例、コンパクトにまとめられている、本とセットであった。

をしていき支援ができるか考える必要がある。研究2、3のような支援ツールのパッケージ化をし、内容も充実させることで、子ども特性やニーズに合った本質的な支援が実施できる。こういった若い先生をサポートするシステム・ツールが重要となる。校内の特別支援教育コーディネーターが活躍するための校務分掌での配慮や校内のシステムの中に位置づけることが鍵となる。

## VI. 今後の課題

研究1は、いずれも20代の若い先生であった。中堅、ベテランの担任へどのようにコンサルテーション